

平成 26（2014）年度マガレイ日本海系群の資源評価

責任担当水研：日本海区水産研究所（井関智明、上原伸二、八木佑太）

参画機関：青森県産業技術センター水産総合研究所、秋田県水産振興センター、山形県水産試験場、新潟県水産海洋研究所

要 約

本系群の資源状況を漁獲量の推移により評価した。漁獲量は 1994～1998 年にかけて半減した後、2008 年までほぼ横ばいで推移した。2006、2007 年には近年としては比較的高い値を示したが、その後の減少により 2009、2010 年には最低水準となった。2013 年の漁獲量も同年と同様の低い水準であり、240 トンであった。

また、2006、2007 年における比較的高い値は、近年としては豊度の高い年級群の加入に対応したものと考えられるが、2014 年および 2015 年に漁獲加入する年級群の豊度は低いと推定される。

以上のことから現在の資源水準は低位、動向は横ばいと判断され、漁獲量を現状よりも引き下げ、親魚量を確保する必要がある。平成 26 年度 ABC 算定のための基本規則 2-2)に基づき、2011 年から 2013 年の平均漁獲量に、資源水準に応じた係数および漁獲量の変動を基に算定した係数を乗じたものを ABClimit とし、さらに 0.8 を乗じて ABCtarget を算出した。

	2015 年 ABC（トン）	資源管理基準	F 値	漁獲割合
ABClimit	180	$0.7 \cdot \text{Cave 3-yr} \cdot 0.94$	－	－
ABCtarget	140	$0.8 \cdot 0.7 \cdot \text{Cave 3-yr} \cdot 0.94$	－	－

10 トン未満を四捨五入。

年	資源量	漁獲量（トン）	F 値	漁獲割合
2012	－	278	－	－
2013	－	240	－	－

水準：低位 動向：横ばい

本件資源評価に使用したデータセットは以下のとおり

データセット	基礎情報、関係調査等
漁獲量・CPUE	漁業種類別漁獲量（青森～新潟(4)県） 沖合底びき網漁獲成績報告書（水産庁） 小型底びき網漁獲成績報告書（水研セ） 板びき網出漁隻数（新潟県）
体長組成	市場測定（新潟県）
体長一年齢	精密測定（新潟県）
新規加入量	幼稚魚分布調査（新潟県）

1. まえがき

マガレイ日本海系群は、主に底びき網と刺し網によって漁獲される重要な沿岸域の水産資源である。近年における本系群の漁獲量は低い水準にあるが、比較的豊度の高い年級群が加入する年もあり、漁獲量は年によって増減がある。水産庁では平成 15 年度から、資源状態が悪化した魚種に対して、資源の回復を目指した「資源回復計画」の対象魚種として本種をとりあげ、漁獲努力量の削減等の対策を講じてきた。同計画は平成 23 年度で終了したが、実施されていた措置の多くは、平成 24 年度以降、新たな枠組みである「資源管理指針・計画」の下、継続して実施されている。

2. 生態

(1) 分布・回遊

マガレイは対馬海峡から間宮海峡北部までの日本海沿岸各地、北海道、南千島、サハリン海域、本州の太平洋側から九州にまで分布する。本系群の主分布域は新潟県から青森県（図 1）で、水深 150m 以浅、水温 5～10℃の砂質、砂泥質の海底に棲息する。成長および季節によって深淺移動を行う。

(2) 年齢・成長

各年代で和田(1970)、加藤(1992)、大西(2009)が年齢・体長関係を調査した。大西(2009)が示した成長式は

$$\text{雄 } L=171.0(1-e^{-0.430(t+0.132)})$$

$$\text{雌 } L=236.5(1-e^{-0.289(t+0.117)})$$

であり（L は 4 月 1 日を年齢起算日とした場合の t 歳時の標準体長 mm）、雌の成長が速い（図 2）。寿命は雌で長く、雌 10 歳、雄 7 歳とされている（新潟県水産試験場 1986）。

(3) 成熟・産卵

本種の産卵期は、新潟県沿岸で 2～5 月（盛期は 3～4 月）、産卵場は水深 50～90m 付近で、分離浮遊卵を産出する。新潟県沿岸においては、雌は 3 歳で約 70%、4 歳で全ての個体が成熟する（加藤 1992）。雄の成熟は 2 歳から 3 歳とされる。体長では雄は 14cm 以上、雌は 16cm 以上で全個体が成熟する（富永ほか 1991）。

(4) 被捕食関係

マガレイの主要な餌料生物は多毛類で、その他には二枚貝、小型甲殻類なども摂食する（富永・梨田 1991）。被食については不明である。

3. 漁業の状況

(1) 漁業の概要

日本海北部でマガレイを対象としている主要漁業は底びき網と刺し網であり、定置網によっても漁獲される。2013 年の漁獲量の比率は、底びき網 63%、刺し網 24%である（図 3）。

青森県では底建網による漁獲割合が高い。刺し網および定置網（底建網を含む）による漁獲は産卵期である2～4月に集中しており、底曳網による漁獲は5、6月と9、10月に多くなっている。また、2013年の県別漁獲量の割合は、青森県8%、秋田県22%、山形県20%、新潟県49%と、新潟県の漁獲量が全体に占める割合が高い（表1、図4）。

（2）漁獲量の推移

マガレイは農林統計の全国集計対象種ではなく、4県すべての漁獲量が計上されたのは1993年以降に限られる。それ以前の年代について、各県の漁獲量の推移（図4）をみると、日本海北部海域では新潟県の漁獲量が占める割合が高いこと、1986年にみられる漁獲のピーク（3県合計で1,103トン）は、新潟県、山形県及び秋田県に共通していることが認められる。なお、1960年代中頃の新潟県の漁獲量の増加には、新潟県沖合で1965年に正式に許可された板びき網の導入による影響も考慮する必要がある。

4県の統計値が参照可能な1993年以降の漁獲量は（図3および4）、1994年の787トンを最高に1998年の371トンまで減少した後、2008年まではほぼ300トン台の横ばいで推移した。途中、年級群の豊度と対応した増減が見られ、2006、2007年には近年としては比較的高い値（402トンおよび389トン）を示したが、2009、2010年には225トン、235トンと最低およびそれに次ぐ低い値となった。2013年の漁獲量は1993年以降で3番目に低い、240トンとなっている。

（3）漁獲努力量

図5および6に各底びき網による漁獲努力量の指標値を示す。1984年以降の統計値が得られ、本系群の総漁獲量の20～30%を占める新潟県の板びき網における出漁隻数（新潟県調べ、主要4港である山北、岩船、新潟および二見の集計）の経年変化を図5（右図）に示す。出漁隻数は、1986年の13,578隻をピークに減少し、2013年は過去最低の4,584隻とピーク時の40%以下にまで減少した。ただし、この出漁隻数は底魚類全体に対する努力量の指標である。

一方、系群の総漁獲量の5～15%に相当する沖合底びき網による漁獲の多くは秋田県北部から青森県にかけての男鹿北部での漁獲であり、上記の新潟県の板びき網とは操業海域が異なる（図6、補足資料2）。漁獲成績報告書に基づく沖合底びき網の有効漁獲努力量（図6右下図、日本海北部計）は、1989年の32,599曳網から2005年の7,866曳網まで急激に減少したが、その後はやや増加し、10,974～16,278曳網（1989年の30～40%）で推移してきた。2012年に男鹿北部の値が前年の半分以下となったため、日本海北部の合計値も2011年の13,467曳網から期間内の最低値である7,522曳網（1989年の23%）まで激減したが、2013年には元の値に近い11,884曳網となった。

このように、参照する指標によって若干の違いはあるものの、本系群に対する底びき網の漁獲努力量は、長期的には減少傾向にある。

4. 資源の状態

(1) 資源評価の方法

マガレイ日本海系群においては、主漁法である新潟県北部の板びき網および男鹿北部を主とする沖合底びき網による漁獲努力量が一貫して減少傾向にあるため、これらを考慮した判断基準を用いることが望ましい。しかしながら、本種はいずれの漁法においても主対象魚種ではなく、それぞれの年で他の有用魚種との相対的な重要性の違いに大きく影響されるため、本種に対する実質的な漁獲努力量を把握することが困難である。そこで日本海北部の青森県、秋田県、山形県および新潟県の4県が集計した漁獲量の経年変化により資源の水準・動向の判断を行うこととした。なお、新潟県によって実施されているマガレイ1歳魚の分布密度調査（補足資料1）、4.（2）で取り上げた資源量指標値である新潟県の板びき網の出漁隻数に基づくCPUE（漁獲量(kg)/隻数、主要4港である山北、岩船、新潟および二見の集計）、および男鹿北部を主な漁場とする沖合底びき網における資源密度指数は参考値として扱った。

(2) 資源量指標値の推移

新潟県の主要4港における板びき網の出漁隻数に基づく1984年以降のCPUE（漁獲量(kg)/隻数、図5左下図）は、1986、1987年および2006、2007年および2012、2013年には15kg/隻以上の高い値となっている。全体としては1980年代後半から1990年代半ばにかけては主として10kg/隻以上と比較的高く、1990年代後半から2000年代半ばにかけては10kg/隻以下で低迷した。近年では2006、2007年の高い値から2009年（11.1kg/隻）にかけて減少後、増加に転じ、2012、2013年はそれぞれ2006、2007年と同水準の16.2kg/隻、15.1kg/隻となっている。同CPUEの動向は、1990年代後半までは系群全体の漁獲動向とよく一致していたものの、近年では相対的に高い水準で推移している。

沖合底びき網による資源量指標値としては、マガレイが沖合底びき網の主な漁獲対象種ではないこと、有漁漁区数が大きく変動していることから資源密度指数（図6左下図、日本海北部計、補足資料2）を使用した。資源密度指数は、2005、2006年には3.4および3.5と比較的高い水準にあったが、その後、減少し、2009年には期間内では2番目に低い1.4となった。その後、やや回復したものの2013年には1.5まで減少している。期間全体で見れば、沖合底びき網の資源密度指数（日本海北部計）は、系群全体の漁獲動向と比較的よく一致するものの、漁獲動向より1年先行した推移を示している。

(3) 漁獲物の体長組成と年齢組成

板びき網の主要港の一つである村上市岩船港に水揚げされた漁獲物の測定結果を、主要3港（山北町、岩船、新潟）の水揚げ量で引き延ばした体長組成を図7に示す。漁獲物の体長組成は15～18cm付近にピークを持つ単峰型かそれに近い組成を示す。なお、新潟県では全長13cm未満は出荷できない。

上記の漁獲物を体長一年齢調査（新潟県）によって年齢分解した年齢組成を図8に示す。漁獲物には2歳魚も認められるがその量は少なく、3歳が漁獲加入年齢と考えられる。3歳

魚の漁獲尾数は 2005 年（2002 年級）で極端に少なく、2006 年および 2007 年には回復したものの、2008 年以降は再び低迷している。

（4）資源の水準・動向

マガレイ日本海系群では、系群全体で参照可能な漁獲統計は 1993 年以降に限られるものの、1971 年以降 1993 年までの各年の青森県の未集計分は全体の 10%程度であると考えられるため、1971 年以降の漁獲量の推移から資源の水準・動向を判断した（図 4）。なお、期間内で最高であった 1986 年には未集計分も考慮して約 1,200 トンの漁獲量（集計分は 1,103 トン）があったと考えられることから、この値を三等分し、漁獲量 400 トン未満、400 トン以上 800 トン未満、800 トン以上をそれぞれ低位、中位、高位の資源水準の判断基準とした。

この判断基準によると、当初、高位～中位で推移し、1994 年には高位との境界付近にあった資源水準は、その後の減少により 1998 年に低位となって以降、ほぼ低位で推移している。2006、2007 年には近年としては比較的高い値を示し、2006 年には中位との境界を僅かに上回ったが、以降、減少し、2009、2010 年には最低水準となった。2013 年の漁獲量は期間内では 3 番目に低い 240 トンと低迷している。以上のように、2013 年の漁獲量が 400 トン未満であることから現在の資源水準は低位、直近 5 年である 2009 年以降の漁獲量が、いったん回復傾向を示したものの再び減少し、2013 年には 2009、2010 年と同程度となったことから資源動向は横ばいと判断した。また、新潟県によって実施されているマガレイ 1 歳魚の分布密度調査から 2011、2012 年級群の推定豊度は低く、2014、2015 年に漁獲加入する 3 歳魚は低い水準にとどまると考えられることから（補足資料 1）、今後、資源状況の低迷が続くことも予想される。

5. 資源管理の方策

マガレイ日本海系群の資源水準は低位、資源動向は横ばい傾向にあると判断される。また 2014、2015 年の 3 歳魚の漁獲加入も比較的低い水準と推定されることから、漁獲量を引き下げて親魚量を確保し、次の高い豊度の年級群の加入を待つことが必要である。

6. 2015 年 ABC の算定

（1）資源評価のまとめ

マガレイ日本海系群の資源水準は低位、動向は横ばい傾向と判断される。2014 年および 2015 年に漁獲加入する年級群の豊度も比較的低い水準と推定されることから、漁獲量を現状よりも引き下げ、親魚量を確保する必要がある。

（2）ABC の算定

現在の資源水準は低位、動向は横ばいと判断されたことから、ABC 算定のための基本規則 2-2)を適用し、次式により ABC を算定した。

$$ABC_{limit} = \delta_2 \times Ct \times \gamma_2$$

$$ABC_{target} = ABC_{limit} \times \alpha$$

$$\gamma_2 = (1 + k(b/I))$$

ここで C_t は t 年の漁獲量、 δ_2 は資源水準によって変える係数、 γ_2 は漁獲量の変動を基に算定する係数。 k は係数、 b と I はそれぞれ漁獲量の傾きおよび平均値、 α は安全率である。本評価では C_t として直近 3 年間（2011～2013 年）の平均漁獲量 275 トン(Cave 3-yr)を用いた。また、同期間の漁獲量から $b(-33)$ と $I(275)$ を求め、 k は標準値の 0.5 として $\gamma_2(0.94)$ を算定した。さらに資源水準が低位と判断されたことから、 δ_2 は C_t として Cave 3-yr を用いた場合の低位水準での推奨値である 0.7 とし、 ABC_{limit} を算出した。さらに不確実性を加味した α を標準値の 0.8 として、 ABC_{target} を算出した。

	2015 年 ABC (トン)	資源管理基準	F 値	漁獲割合
ABC_{limit}	180	$0.7 \cdot \text{Cave 3-yr} \cdot 0.94$	－	－
ABC_{target}	140	$0.8 \cdot 0.7 \cdot \text{Cave 3-yr} \cdot 0.94$	－	－

10 トン未満を四捨五入。

(3) ABC の再評価

昨年度評価以降追加されたデータセット	修正・更新された数値
2013 年漁獲量確定値	2013 年漁獲量の確定
2013 年資源量指標値確定値	2013 年資源量指標値の確定
1993～2012 年漁獲量修正値	1993～2012 年漁獲量の修正

評価対象年 (当初・再評価)	管理基準	資源量	ABC_{limit} (トン)	ABC_{target} (トン)	漁獲量 (トン)
2013 年 (当初)	$0.8 \cdot \text{Cave 3-yr} \cdot 1.08$	－	230	180	
2013 年 (2013 年再評価)	$0.8 \cdot \text{Cave 3-yr} \cdot 1.08$	－	230	180	
2013 年 (2014 年再評価)	$0.7 \cdot \text{Cave 3-yr} \cdot 1.08$	－	190	150	240
2014 年 (当初)	$0.8 \cdot \text{Cave 3-yr} \cdot 1.04$	－	240	190	
2014 年 (2014 年再評価)	$0.7 \cdot \text{Cave 3-yr} \cdot 1.04$	－	200	160	

2013 年 (当初、2013 年再評価) および 2014 年 (当初) の ABC 値は、平成 26 年 7 月 4 日に訂正された ABC 算定のための基本規則に基づき計算した。2013 年 (2014 年再評価) および 2014 年 (2014 年再評価) は、平成 26 年度 ABC 算定のための基本規則 2 の係数の推奨値に基づき計算した。2013 年 (当初、2013 年再評価) と 2014 年 (当初) に用いた係数で計算した場合の 2013 年 (2014 年再評価) の ABC_{limit} は 220 トン、 ABC_{target} は 180 トンであり、2014 年 (2014 年再評価) の ABC_{limit} は 230 トン、 ABC_{target} は 180 トンである。

7. ABC 以外の管理方策の提言

現在、マガレイ日本海系群に対しては、各県で全長 13～17cm 未満の出荷あるいは採捕制限が行われている。しかし、当系群に対する主漁法である底びき網では、多くの魚種を対象とするため、単純な網目の拡大は困難であり、また、再放流魚の生残に関しても不明であることから、産卵期に漁獲が集中する刺し網、定置網も含め、産卵期や産卵海域に着目

した親魚保護の取り組みが有効であろう。

水産庁では本資源と日本海北部のハタハタを対象とした「資源回復計画」を策定し、平成15年度より漁獲努力量の削減等の対策を講じてきた。同計画は平成23年度で終了したが、実施されていた措置の多くは、平成24年度以降、新たな枠組みである「資源管理指針・計画」の下、継続して実施されている。

8. 引用文献

- 加藤和範(1992) 新潟県本州沿岸域におけるマガレイの資源生物学的研究. 漁業資源研究会誌北日本底魚部会報, 25, 27-49.
- 新潟県水産試験場(1986) マガレイ. 昭和61年度新潟県沿岸域漁業管理適正化方式開発調査報告書, 6-18.
- 大西健美(2009) VPAを用いた新潟県北部海域におけるマガレイの資源評価. 新潟水海研報, 2, 27-35.
- 富永 修・梨田一也(1991) 新潟県北部沿岸域におけるマガレイと底生魚類の種間関係. 日水研報, 41, 11-26.
- 富永 修・梨田一也・前田辰明・高橋豊美・加藤和範(1991) 新潟県北部沿岸域におけるマガレイ成魚群の生活年周期と分布. 日水誌, 57, 2023-2031.
- 和田克彦(1970) 新潟県沖合産マガレイの資源生物学的研究 1. 年令と成長. 日水研報, 22, 31-43.

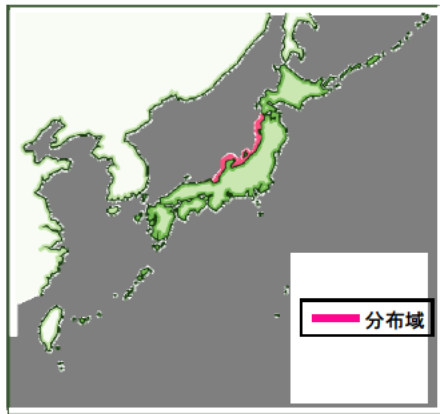


図1. マガレイ日本海系群の分布域

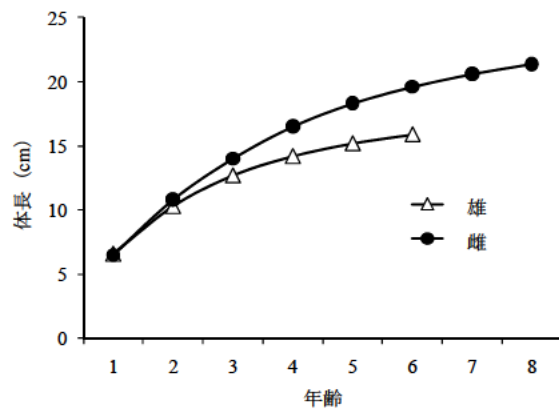


図2. 年齢と成長の関係 (大西 2009)

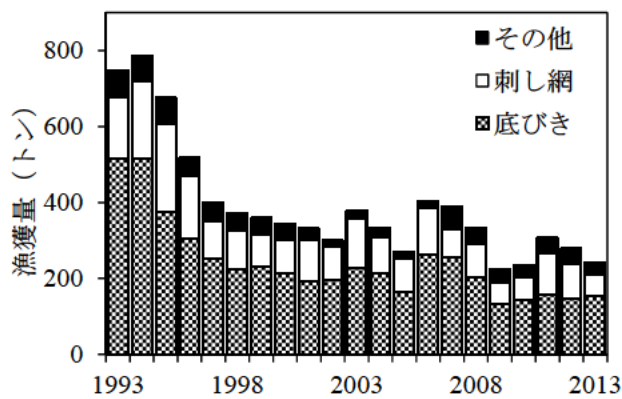


図3. 漁業種類別漁獲量

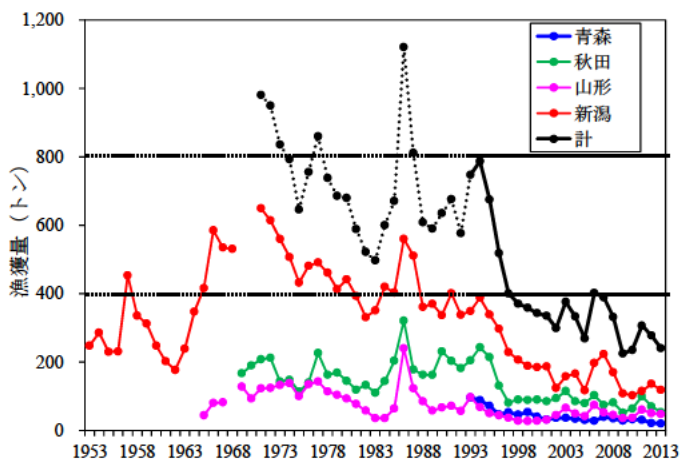


図4. 日本海北部における県別漁獲量の推移

※日本海北部計の1992年以前(破線部)は青森県を除く。漁獲量400トンおよび800トンにおける破線(1993年以降は実線)はそれぞれ中位の資源水準の下限及び上限を示す。

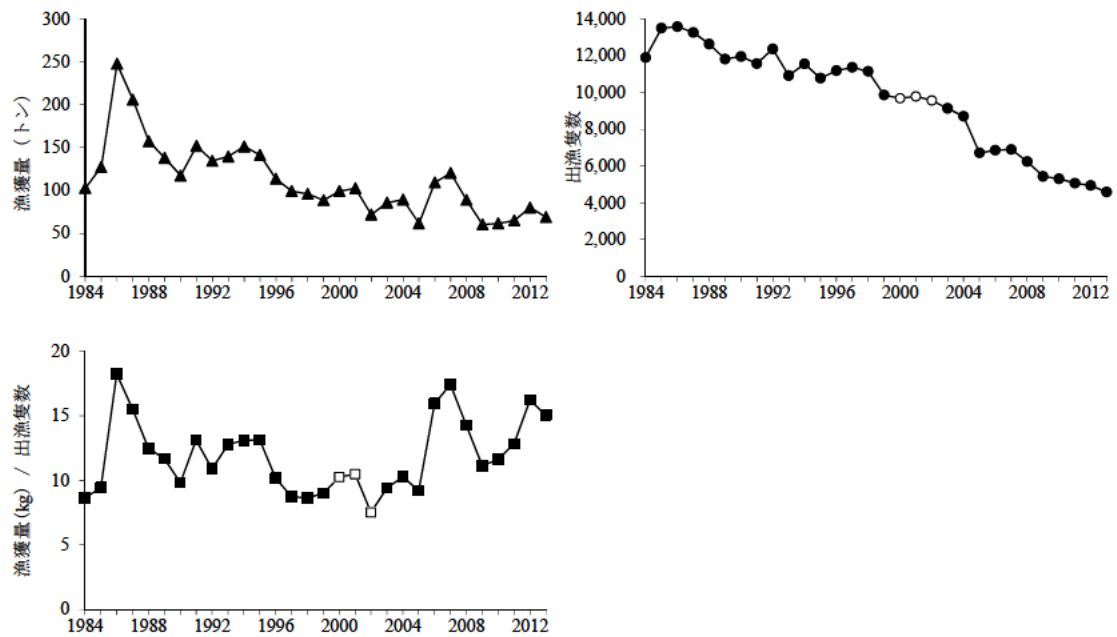


図 5. 新潟県北部の板びき網による漁獲量（左上）、出漁隻数（右）および CPUE（左下）
 [新潟県主要 4 港（山北、岩船、新潟、二見）※白抜きの 3 年間は出漁隻数データに未集計分がある]。

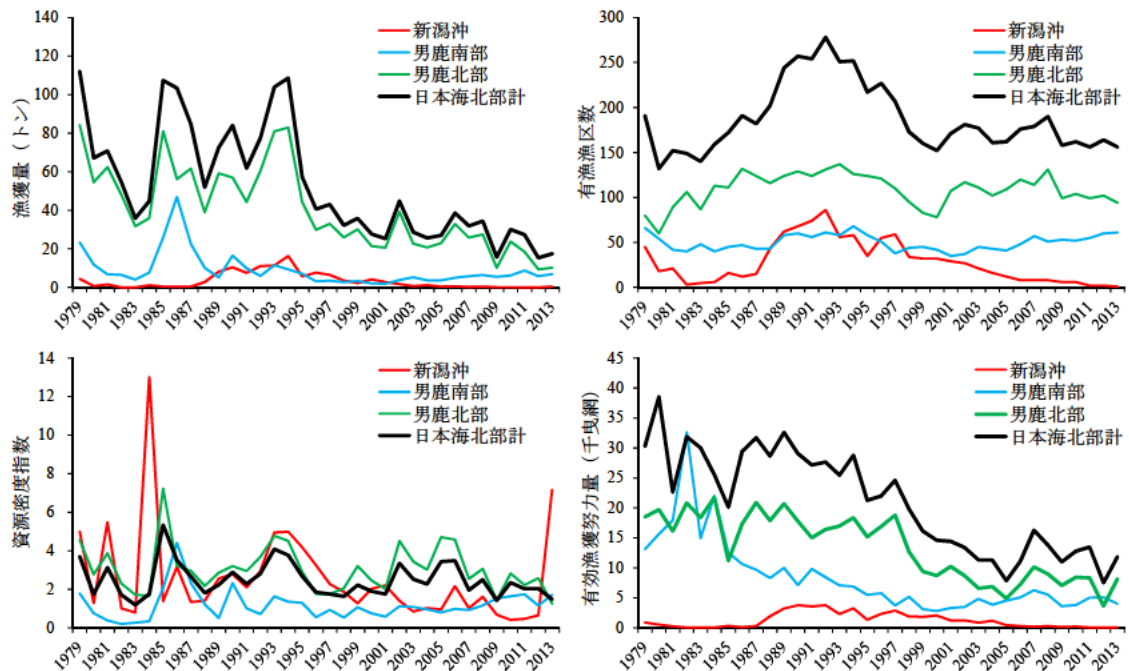


図 6. 沖合底びき網の漁獲量（左上）、有漁漁区数（右上）、資源密度指数（左下）
 および有効漁獲努力量（右下）

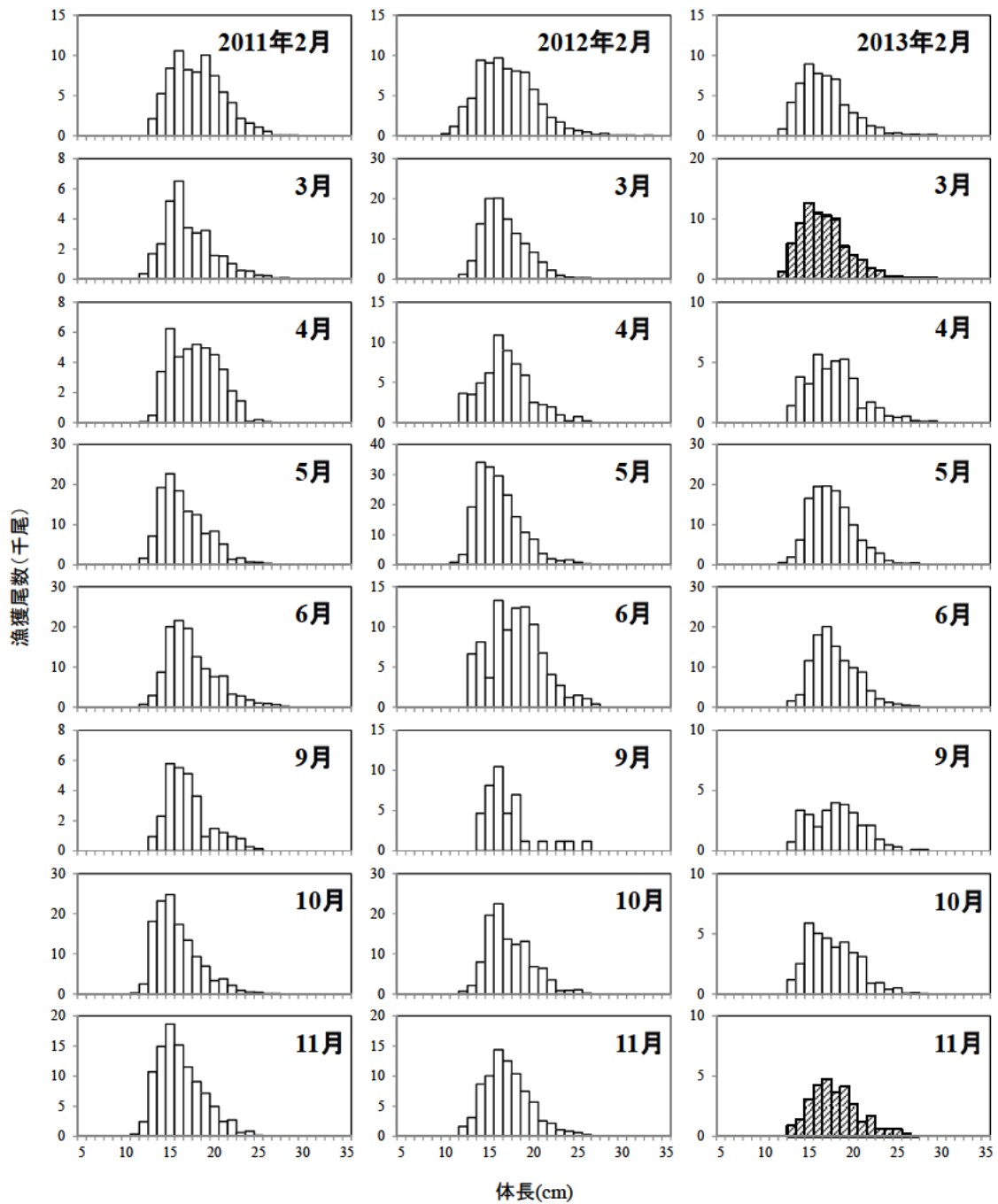


図 7. 板びき網漁獲物の体長組成（2011～2013 年：新潟県調べ）

新潟漁協岩船支所における調査値を主要 3 港（山北・岩船・新潟）の板びき網漁獲量で引き延ばした。

※ 斜線で示した 2013 年 3 月、11 月では当該月の体長組成データが得られなかったため、それぞれ同年 2 月、12 月の体長組成を 3 月および 11 月の漁獲量で引き延ばした値で示した。

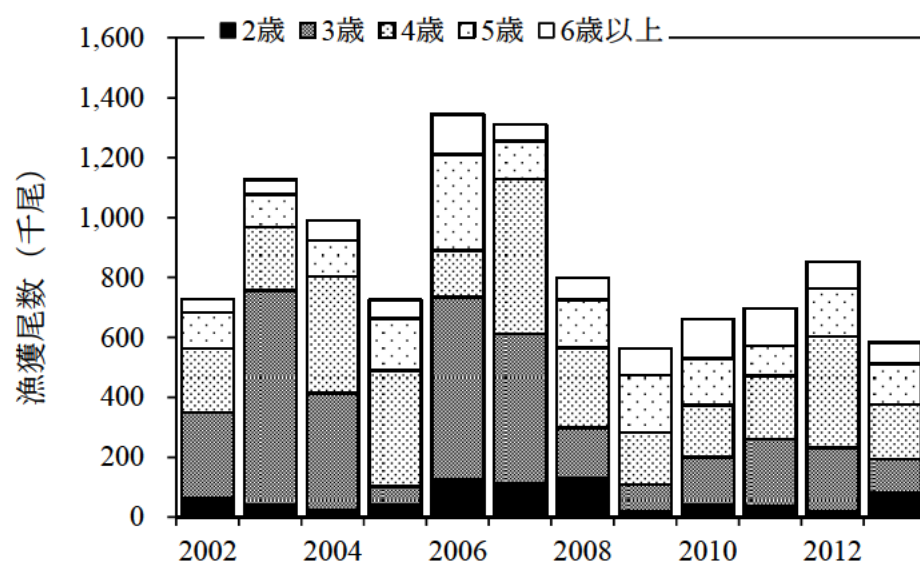


図 8. 板びき網によるマガレイ年齢別漁獲尾数（新潟県北部、主要 3 港）

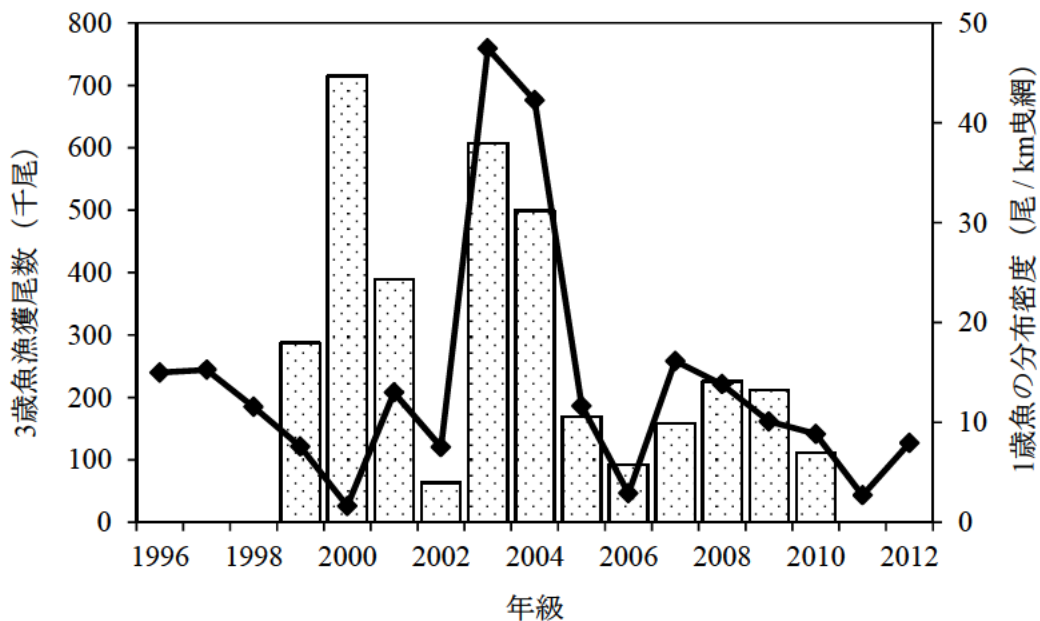
表 1. 日本海北部 4 県の漁業種類別漁獲量

単位：トン

年	青森県				秋田県				山形県				新潟県				総計
	底びき	刺し網	その他	計	底びき	刺し網	その他	計	底びき	刺し網	計		底びき	刺し網	その他	計	
1980					100	44	1	145			93		352	80	15	447	685
1981					70	47	2	119			77		273	56	14	343	539
1982					55	76	2	133			58		217	71	20	308	499
1983					39	70	1	110			36		190	80	21	291	437
1984					46	98	0	144			36		218	96	27	341	521
1985					163	41	0	204			64		328	82	18	428	696
1986					178	142	1	321			240		430	83	29	542	1,103
1987					103	72	3	178			123		405	76	20	501	802
1988					63	100	0	163			85		274	76	11	361	609
1989					57	103	2	162			58		249	80	31	360	580
1990					88	141	2	231			67		239	78	20	337	635
1991					63	138	2	203	48	24	72		298	83	20	401	676
1992					62	119	1	182	29	28	57		272	54	12	338	577
1993	38	2	56	96	102	101	2	205	79	18	97		296	41	12	349	747
1994	35	2	52	88	104	138	1	243	55	13	68		321	53	14	388	787
1995	15	3	54	72	58	156	0	214	30	20	50		271	55	13	339	675
1996	10	3	33	46	39	91	1	131	24	20	44		231	51	15	297	518
1997	13	7	34	53	31	49	1	81	27	10	37		180	34	15	229	400
1998	15	4	27	46	29	59	2	90	16	12	28		163	29	15	207	371
1999	17	8	30	54	39	48	2	89	19	8	27		156	19	14	189	359
2000	8	4	28	40	32	56	2	90	22	6	28		152	20	13	185	343
2001	5	7	20	32	28	56	1	85	18	13	31		139	34	9	182	330
2002	15	8	13	36	47	45	2	94	32	13	45		102	21	1	124	299
2003	10	10	16	37	42	69	5	115	43	24	66		132	25	1	158	376
2004	8	5	20	34	44	40	2	85	28	21	49		131	30	2	163	331
2005	10	6	14	30	32	45	2	79	31	11	42		90	26	1	117	269
2006	10	6	12	28	43	59	2	103	47	27	74		161	33	3	197	402
2007	14	5	21	39	37	35	2	74	38	14	52		167	20	36	223	389
2008	12	5	18	35	36	43	3	82	23	22	45		130	21	19	170	332
2009	8	3	18	28	21	28	3	52	21	15	36		83	11	14	108	225
2010	12	5	15	32	32	30	1	64	23	14	37		76	9	17	103	235
2011	7	8	16	31	37	61	2	100	33	27	60		81	14	21	115	306
2012	2	3	16	21	16	52	3	70	29	21	50		99	15	22	136	278
2013	7	3	11	20	25	27	2	54	34	13	48		86	14	18	118	240

補足資料 1 今後の加入の見積もり

新潟県によって実施されているマガレイ 1 歳魚の分布密度調査を指標とした年級群豊度と板びき網による 3 歳魚の漁獲尾数の関係を、年級群を基準に補足図 1 に示す。両者の年変動の傾向は 2000 年級群では大きく異なるが、その他の年級ではよく一致する。板びき網の漁獲量が低下した 2005 年は（図 5）、3 歳魚（2002 年級群）の漁獲尾数が極めて少なく（図 8）、1 歳時の分布密度から 2002 年級群の豊度は低く推定されている。一方、年級群の推定豊度が大きく増加した 2003～2004 年級群が 3 歳魚となる 2006 年及び 2007 年には漁獲量は回復し、両年における 3 歳魚の漁獲尾数も多かった。しかし、2005 年級以降における年級群の推定豊度及び 3 歳魚の漁獲尾数は低水準となり、2008 年以降の漁獲量は再び低迷した（図 5）。2012、2013 年における 1 歳魚の分布密度から推定される 2011～2012 年級群の推定豊度も高くはなく、この結果から予測される 2014～2015 年の 3 歳魚の漁獲加入は低い水準にとどまると考えられる。



補足図 1. 年級群毎の 3 歳魚時の漁獲尾数（板びき網、新潟県北部主要 3 港、棒グラフ）と 1 歳魚時の分布密度（年級群豊度、折れ線グラフ）の関係

※2001 年（1998 年級）以前の 3 歳魚漁獲尾数は未調査。

補足資料2 沖底漁獲成績報告書を用いた資源量指標値の算出方法

沖底漁獲成績報告書では、月別漁区(10分柁目)別の漁獲量と曳網数が集計されている。これらより、月*i*漁区*j*におけるCPUE(*U*)は次式で表される。

$$U_{i,j} = \frac{C_{i,j}}{X_{i,j}}$$

上式で*C*は漁獲量を、*X*は努力量(曳網数)をそれぞれ示す。

集計単位(月または小海区)における資源量指数(*P*)はCPUEの合計として、次式で表される。

$$P = \sum_{i=1}^I \sum_{j=1}^J U_{i,j}$$

集計単位における有効漁獲努力量(*X'*)と漁獲量(*C*)、資源量指数(*P*)の関係は次式で表される。

$$P = \frac{CJ}{X'} \quad \text{すなわち} \quad X' = \frac{CJ}{P}$$

上式で*J*は有漁漁区数であり、資源量指数(*P*)を有漁漁区数(*J*)で除したものが資源密度指数(*D*)である。

$$D = \frac{P}{J} = \frac{C}{X'}$$